

# 「女三の宮」造型について

松尾 貴子

女三の宮は、「源氏物語」に登場する幾人もの女性の中で、ただ一人、他の女性達とは異なった、特殊な位置付けと性格を持つ女性として描かれている。すなわち、葵亡き後の源氏の正妻として六条院に降嫁したこと、またかなり幼さの残る無邪気な性格であること、の二点において、作者は特別に女三の宮を造型した。なぜ、わざわざ「藤裏葉」巻最後の優美で理想的な六条院世界に、女三の宮のような人物を作者は正妻として登場させ、みすみす悲劇を起こさせたのだろうか。

私は、作者・紫式部が、単に「源氏物語」を展開させる手段として女三の宮という人物を登場させたのではなく、女三の宮を造型した意図に、何か特別なものがあるように思えてならない。女三の宮の造型を探りながら、その存在の意図するものを、私なりに考えてみたい。

Ⅰ 源氏の正妻としての女三の宮について

源氏の正妻についての女性は、なぜ、今までになかったタイプの女三の宮でなければいけなかったのだろうか。人物

像の特色を、「幼さ」と「意志のなさ」について考察する。

Ⅰ 女三の宮の人物像

⑦ 女三の宮の「幼さ」の設定

女三の宮を示す形容詞には、「幼し」「いはけなし」「わかし」等、宮の幼稚性を示す言葉が多く、しかも繰り返し用いられている。(若菜上く鈴虫巻で、十六種、のべ五十八回使用。) 幼少であること、無邪気であること、無分別である様を表す言葉を、言い方を變えて多用することで、宮の未熟な印象は強められる。が、宮の幼さは、年令によるものというよりその性質にある。六条院降嫁の時点で、女三の宮は十四〜十五才であるが、紫の上が源氏と結ばれたのも十四才であり、両者を比較しても、宮の幼さは年令上のものだ、とは言い難い。また、女三の宮の妹に、女四の宮がいるにもかかわらず、父の朱雀院の出家後の心配は、女三の宮にむかっていることから、その幼稚性は、性質に由来するようだ。

一般的には、性質的幼さも、年を重ねるごとに少しずつ

薄れていくものであろうが、女三の宮には、そういったある程度<sup>の</sup>時間さえも多くは与えられていない。薫出産後、すぐに出家してしまつたからだ。出産後の女三の宮は、六条院にとつて薫の母親であるということ以外、殆んど影の薄い存在なのである。

以上のことから、女三の宮は、性質上の幼さを一貫して背負われ続けたといえる。

#### ④意志のない女性としての女三の宮

“若菜”から“柏木”巻までの女三の宮は、六条院に降嫁し、柏木との密通事件を経ての薫の出産、そして出家という、女性のその後の人生を方向づける重大な出来事を次から次に経験した。経験したというよりはむしろ、これらの運命が、突然彼女にふりかかつてきて、彼女自身の意志を自分で確認する間もなく、無理矢理そうなつた、といった方が妥当かもしれない。

彼女にはもともと、結婚にしろ、密通にしろ、出産にしろ、それらの意志はなかつた。だが唯一、髪を下ろしたのは、彼女が自分で望んだものであり、父朱雀院に、はっきりと出家の意志があることを伝えている。しかし、実は、これも本当に彼女の意志であつたのかどうかは疑問なのである。あまりにも冷酷な見解であるのだが、出家が宮の本心なのか考えさせられる次の箇所につきあたつてしまつたらだ。

○後夜の御加持に、御物の怪出て来て、「かうぞあるよ。

いとかしこう取り返しつと、一人をば思したりしが、いと妬かりしば、このわたりにさりげなくてなん日ごろさぶらひつる。今は帰りなん」とてうち笑ふ。いとあさましう、さは、この物の怪のここにも離れざりけるにやあらんと思すに、いとほしう悔しう思さる。

(柏木・三〇〇頁)

髪を下ろした後に物の怪が現れ、女三の宮に数日とり憑いたことを源氏に言つて笑うのである。よつて、物の怪が宮を巧みに操つて最終的に髪を下ろすという決断をさせた可能性もあるのだ。すべて物の怪の仕業で、宮に出家の意志は本来無かつたとは断言できないが、いきなり付けたしたかのように、作者が物の怪を登場させたのは、宮自身の意志で髪を下ろしたかは不明だと推察する余裕を、残すためだつたのではないだろうか。

女三の宮は、出家の意志さえも、作者によつて結局のところ曖昧にされてしまつた。作者は、自分の意志で判断し行動する能力を持っているのか持っていないのかかわらないような宮をあえて描いた。女三の宮は自分の身にふりかかつた運命に対し、自分にとつて不利にならぬ様に判断する能力があるのかないのかわからない人物なのである。

#### 2 紫の上との微妙なバランスについて

今度は、女三の宮降嫁の時点に戻つて、宮の人物像を踏まえながら、六条院側の視点で紫の上との位置関係を考慮して『正妻となる女性』について考えてみたい。

森市郎氏は、「女三の宮の降嫁が誰よりも紫の上に大きな外面的・内面的打撃を与えること」を論じている<sup>キ</sup>。そしておそらく紫の上の打撃の核となっているものは、長年連れそった源氏に愛されている自分への不信感と、愛情喪失感であろう。つまり、紫の上にとっては、「正妻」を六条院に迎えるということだけで、その『正妻となる女性』がどういった人物であるかは関係なく、身に耐えかねる苦しみとなることを考えると、作者が女三の宮のような人物を正妻に置いた理由が『正妻となる女性』と紫の上との微妙なバランス、すなわち、外面的・内面的位置関係をギリギリで持ちこたえるような危なげな均衡を保持させるためであったのではないかと推察されるのだ。紫の上にとっては、正妻を迎えることとその存在だけで大きな外面的ダメージを受ける。正妻となる女性の人物像は、その紫の上のダメージをカバーするぐらいのダメージを持った負の性格でなければならぬ。また、逆に正妻となる女性が身分も高く人物的にも申し分なかったら、その女性は紫の上を越えてしまうことになり、物語の最低限のリアリティは希薄になってしまう。

こう考えると、正妻となる女性が、女三の宮のように幼さと意志のなさという、紫の上の人物像と比較して、かなり内面的に負の性格を持たねばならなかった理由が、微妙なバランスを維持させるためであったのではないかと、思われるのである。

また、紫の上の哀しみは、源氏に愛されている自分への

不信感と、愛情喪失感であろうと想像できるが、それらは彼女自身の内面世界に向かっていて、紫の上は哀しみのベクトルを源氏や女三の宮の方向ではなく、全て自分の内部へ向けている。一方、女三の宮の精神活動も、周りを顧みない幼さから自分の内部に向かっていて、彼女達は、自分の精神活動が内部へと向かう点で共通性を帯びている。が、両者には、その内部へと向かう以前の、周囲の状況を把握しているかいないか、というはっきりした違いがある。

紫の上の場合は、自分の置かれている立場や状況を把握し、自分はこうあるべきだ、と判断して、源氏や女三の宮の立場を思いやって表面は何気ないふりを装って哀しみに耐えているのだ。表面が平静であるだけに、哀しみは自己の内部へ向かってしまう。直接に源氏を憎む気持ちや、女三の宮の存在をうとましく思う気持ちよりも、源氏一人を頼り信じきって生きてきた自分に対する哀しみの方が強いのだ。

対称的に、女三の宮は、状況を把握しようとは思っていないし、周囲に気を配ろうとはしない無邪気な幼さからも、興味の対象は自分にしかないのではないかと、思えてしまうのである。

よって、女三の宮と紫の上との関係を考える場合、両者は極めて対称的で、またその微妙なバランスを保持させるために『正妻となる女性』としての女三の宮の性格は造型されたのではないかと、言えるのである。

## Ⅱ 女三の宮が引き起こす悲劇

く 柏木事件についてく

次に、女三の宮の降嫁―源氏の正妻としての女三の宮という視点を、もう一つの事件である女三の宮と柏木との密通事件に移して、1、宮一人が悲劇の原因となること、2、悲劇のヒロインでありながら不明瞭な明るさを伴うこと、の二点を中心に論じることとする。

### 1 宮一人が悲劇の原因となること

柏木との密通、懐妊、そして薫出産後の出家、いずれも女三の宮にはそれらの意志はなかったとしても、これらのことは全て、女三の宮自身が発端となつて起つたという事実は否定できない。女三の宮は、明確な意志を持たない分別心に欠けている人物であるがゆえに、次の悲劇の引き金となるカードを知らず知らず選んでいった。つまり、女三の宮は、巻き込まれ型の悲劇のヒロインであると同時に、その悲劇を決定付けるようなことを、彼女自身がやつてしまふという、矛盾した行動をする女性であるのだ。

あの六条院での蹴鞠遊びの日、どうしても女三の宮を諦めきれずに、今では源氏の出家を願うまでになつた柏木に、姿をかいま見られてしまったのも、もちろん猫が御簾を引き開けたせいもあるが、宮が蹴鞠に興味をそそられて端近に立ち上がっていた当時の貴婦人らしからぬ謹慎さも指摘されている。Ⅱの題目を「女三の宮が引き起こす悲劇く 柏木事件についてく」としてはいるが、ここで悲劇という

のは、女三の宮と柏木の密通そのものにあるのではなく、このように宮の無分別が、それを決定させてしまうことにある。蹴鞠遊びの場面で姿を見られてしまうこと。賀茂祭の一夜以後も柏木の求愛を拒みきれないこと、また、ことと等、そうしようとする意志はないにもかかわらず、宮の分別のない性格が、悲劇を決定付ける要因になっている。

石田穰二氏は、「宮には性格自体が欠けていて、その無抵抗性は個人的な一人の人間のレベルではなく精神の問題で、思想的なものにある」と言っている。そして、女三の宮という人物を、もはや一人の人間として物語で捉えずに、「全く普遍的な、精神の主題」「その奇態な輪郭をひくことだけしか可能ではなかった、原質そのもののような思想の姿」として捉えている。宮は表面上は幼げで美しく可愛らしく無邪気であるのだが、その容姿からは簡単には想像できない精神的な問題を抱えているのだ。その精神的な問題について作者は、肯定も否定もしていない。ただ宮を通してその極まった姿を描いているのだ。当時の宮廷社会においての女性の立場からすると、宮のような女性、すなわち精神的な問題を知らず知らず抱えていた女性は、宮中では特に少なくはなかったであろう。

だが、女三の宮は「源氏物語」に登場する物語上の一女性にすぎない。ここまで書く歴史を背景にしたフェミニズム観のようなものに話が飛んでしまふので、次に、女三の宮には悲劇でありながらも何故かこちらが呆れてし

まいそんな不明瞭な明るさが伴っていることについて、新たな考察を加えることとする。

2 悲劇のヒロインでありながら不明瞭な明るさを伴うことについて

女三の宮が抱える精神的な問題を、どういった言葉を使えば、少しでも正確に表現できるのだろうか。彼女が抱える問題は、密通が露見したとわかった場面で特に顕著である。女三の宮は、それを読めばたちまち密通が知られてしまふような重大な手紙を忘れていたのだ。が、このことのみを丹念に考察しても宮の精神的な問題に触れることはできない。忘れていた、というのは単純すぎる、それ以上追求しようのない答えであるので、こちら側としては呆れる他ない。むしろ、密通発覚以前の、まだ源氏に知られていない、平静に振る舞えば安心な時期に、明るい所にさえ出れずに悩み苦しんでいた彼女と、手紙が見つけれられたのを知り涙を流しつつも「忘れてしまった」といとも簡単な返答をする彼女との落差に、どうしようもない不明瞭な、単純すぎる何かが存在するように思う。

どう捉えるか非常に複雑な、精神的な問題とは、この不可思議な不明瞭な明るさに裏付けられるのではないか。今井源衛氏は、「女三の宮にとって柏木との事件でさえも深い傷ではなく、幸福も不幸も自己の主体がない限り世に存在しない、宮は誇張していえば、白痴的に明るい世界の住人だ」としている。女三の宮に、不明瞭な明るさが伴う

のは、彼女の生が受け身にあるからではないか。宮の精神世界は何かに従うことにより形成されているので、どんな幸福も不幸も人によって与えられたもので、例えるなら、深い悲しみに沈んで、自分一人で解決するような経験を免れるかわりに、心から喜べる幸福な瞬間を味わうこともない。何か自分以外のもの、すなわち他者に自分を委ねる生き方は、何もかも直接自分とは関係ないことと受けとめられ真に傷つくことはない。それで十分幸福だと思えるのなら、それ以上のものを求める必要などないのだろう。そしてそれは、皇女として宮廷社会に位置する女性の生き方であれば決して悪いとはいえない。

### Ⅲ 女三の宮を描いた作者紫式部の願い

前章より、女三の宮には不思議にあっけらかんとした明るさがあるが、それは宮が他者依存の生き方をしているからではないか、と考察した。

他者に自分の幸・不幸を委ねる生き方が正しいか正しくないかは、自分自身が判断すれば良い。だが、判断できるまで明確な自分というものが育たなかったらその基準さえも持たないことになり、周りに流されるままにそうとは知らず辛い目に遭う事態を引き起こしかねない。だが、それは程々に幸福である。

反対に、明確な自己の意志はあるが、それを正直に出してしまふと、他者を束縛し、それが自分の苦痛になるので、あえて口にも態度にもしない、感情は内面世界へ向かう。

極端ではあるが、これは前者が女三の宮であり、後者が紫の上である。非常に対称的だが、感情が内部へ向かう点で両者は共通している。そして二人とも女性なのである。紫式部の女性の生き方への考え方、価値観といったものが、この二人の女性の生き方に端的に表れているのではないかと私は考える。

物事の深く心にしみる情趣やおもしろく風流なことを知りながら、ひきこもりおとなしくしている無言太子の苦痛（この場合、知っているのは情趣や風流といったものではなく精神活動全般、特に嫉妬や憎しみ哀しみ等を自分自身でわかっている、ということも示すのではないか）を、紫の上も紫式部もいやというほど味わったのではないか。もしも最初から自分で、物事の心にしみる情趣やおもしろく風流なことに目を閉じ、精神活動による己れの明確な意志をも殺して生活するならば、おそらくこの無言太子の悲痛な苦しみを味わわずに済むだろう。だが、その代償として、世の中に生きてゆく晴れがましさや、無常な世の中の所在なさを慰めるすべをなくすことになる。また、それ以前の段階で停まってしまった状態、すなわち、情趣や風流を解する自己の基準を持たず、自分の意志も明確でない状態のまま生活するならば、無言太子の苦痛を初めから知るこゝとなく生きていくことができる。

作者は、無言太子の苦痛を知るか知らないかによる対称的な二つの生き方を提示し、読者に、あるメッセージをしているのではないか。紫の上は、まだ幼い女一の宮の身を

心配してこう言っている。「わが心ながらも、よきほどには、いかでたもつべきぞ」我ながらほどよく身を持つるには、どうすれば良いのだろうかこの独言に近い箇所には、作者の願ひ、女三の宮を造型した意図が凝縮されて表れているのではないかと私は思う。どちらの生き方が正しいとか悪いとか、私（作者）が言うことではない。けれど、女性として生まれてほどよく生きていくにはどうしたら良いか、という疑問は持つてほしい、せめて持つまでは精神的に健康に育つてほしいという作者の願ひが、ここに込められているのではないかと。そして、この二つの生き方の存在を知つてほしい、ほどよく生きていくにはどうしたら良いかという疑問は持つてほしいと、決して押しつけてはいないが、読者に対してメッセージしているのではないかと私は思う。

### 結び

紫式部が女三の宮を造型した意図には、宮の姿を通して一つの女性の生き方を浮かび上がらせ、それとは反対に位置する紫の上の生き方を示した上で、「わが心ながらも、よきほどにはいかでたもつべきぞ」我ながらほどよく身を持つるには、どうすれば良いのだろうかという疑問を、読者に、そうとはわからぬように提示する、ということがあったのではないだろうか。この一文は、紫の上の眩きであり、彼女自身の嘆きというよりも、まだ幼く、これから無言太子の苦痛を知る可能性のある少女に対して発せられ

た言葉である。この幼い少女である女一の宮は、源氏物語を読む全ての女性であり、紫の上は作者なのである。

女三の宮という人物も、その存在も、生き方も、決して悪くはないのである。父朱雀院の育て方も決して悪かったのではない。ただ言えることは、女三の宮のような生き方も女性の生きていく一つの姿ということだけであって、作者も、宮は無邪気で可愛らしい愛されるべき女性であり、宮の生き方も一つの生の姿であるのだ、ということを度々確認しながら、女三の宮という人物を描いたのではないだろうか。

※注(書名、著者名、出版者名・年月等)

1、「源氏物語の方法」女三の宮降嫁の事件」

森一郎 桜楓社 昭和四十四年六月

2、「女三の宮と柏木について」

石田穰二 至文堂 国語と国文学 昭和二十六年十月

二月号

3、注2に同じ

4、「柏木と女三の宮」

今井源衛 学燈社 国文学解釈と教材の研究 昭和

三十四年九月号

〈参考文献〉

「源氏物語の創造」

野村精一 桜楓社 昭和四十四年九月

「女三の宮の降嫁」

大朝雄二 桜楓社 源氏物語正篇の研究 昭和五十年

「紫式部諸説一覽」

島田良二 学燈社 国文学解釈と教材の研究 昭和五十七年十月

等。

※ 本文引用のページ数は「源氏物語四 日本古典文学全集

15」(小学館)のページ数をそのまま引用。

